

5 イラクサギンウワバの発生実態と薬剤感受性

ねらいと成果

イラクサギンウワバは、海外では著名な野菜害虫であるが日本での発生は少なく、これまで害虫として問題になったことはほとんどなかった。ところが一昨年に県下で多発生が認められ、昨年も同様に多発した。今後こうした状態が続くことが懸念されるが、兵庫県はもとより日本では本種の防除に関する知見はない。そこで防除対策として県下の発生実態を調査するとともに、幼虫の薬剤感受性を調べた。その結果、秋作野菜に発生しているウワバ類のほとんどがこのイラクサギンウワバであることがわかった。また一部の有機リン剤や IGR 剤に対しては著しく感受性が低いことが明らかになった。

内容

(1) 発生実態調査

2000年9月、明石市のキャベツほ場でイラクサギンウワバ幼虫の多発生を認めた。2001年の秋にさらに詳しく調査したところ、野菜類に発生しているウワバ類のうち95%がイラクサギンウワバであった。キャベツ、ブロッコリー、ハボタンなどアブラナ科作物をはじめ、レタス、キク、ピーマン、オクラでも加害がみられており寄主範囲は広い。これまで発生を確認した地域は明石市、加西市、三原町、五色町であるが、県下全域で発生している可能性がある。ちなみに県外では昨年鹿児島県と和歌山県で多発生が確認されている。

(2) 薬剤感受性の検定

検定はキャベツ葉による葉片浸漬法で行い、供試虫は2001年9月に明石市のキャベツほ場で採集した

個体を累代飼育したものをを用いた。

結果は表に示した。本種は有機リン剤 (PAP、アセフェート、DEP)、IGR 剤 (テフルベンズロン、フルフェノクスロン)、カルタップに対する感受性が著しく低いことがわかった。合成ピレスロイド剤 (シベルメトリン、エトフェンプロックス) やエマメクチン、クロルフェナピルに対する感受性はきわめて高く、次いでカーバメート剤 (メソミル、チオジカルブ)、BT 剤に対する感受性が高かった。

露地ほ場で実施した薬剤防除試験では、やはり PAP 乳剤に全く効果がみられなかった。また、エマメクチン乳剤では一時的に高い効果が認められたものの、同時に発生していたハスモンヨトウよりも密度の回復が早かった。

今後の方針

生産者によれば、このような強いウワバは数年前から目立っているという。幼虫の形態が従来からいるタマナギンウワバにきわめてよく似ていることもあって、本種の確認が遅れた可能性が大きい。本種は難防除害虫としての素質を十分持っているので今後の発生動向に注意が必要である。

八瀬 順也 (農業技セ・病虫害防除部)

表 イラクサギンウワバの薬剤感受性

薬 剤	希釈倍数	補正死虫率*	
		%	
合ピレ	シベルメトリン乳剤	1000倍	100
	エトフェンプロックス乳剤	2000倍	100
有機リン	PAP乳剤	1000倍	0
	アセフェート乳剤	1000倍	7
	DEP乳剤	1000倍	6
	DDVP乳剤	1000倍	82
カーバメート	メソミル水和剤	1000倍	88
	チオジカルブフロアブル	1000倍	71
BT	エスマルクDF	1000倍	100
	ゼンタリ顆粒水	1000倍	87
IGR	テフルベンズロン乳剤	2000倍	0
	フルフェノクスロン乳剤	2000倍	60
ネライストキシ	カルタップ 顆粒水溶剤	1500倍	24
その他	エマメクチン乳剤	2000倍	100
	クロルフェナピルフロアブル	2000倍	100

\* BT, IGRは5日後、その他は3日後の値



図 イラクサギンウワバの幼虫 (左) と成虫